

伊豆八十八霊場巡礼・巡拝畢会

報告者 西原京子

年月日 2009年05月10日(日・快晴)

参加者 22名

巡礼寺・順 法多山・尊永寺

- \* 正観世音菩薩
- \* 山号・法多山
- \* 真言宗
- \* 草創・神亀2年(725)
- \* 法多山は、寺号を尊永寺と称し、高野山真言宗に属し本尊正観世音菩薩は俗に厄除観音として知られています。神亀2年(725) 聖武天皇の勅命を受けた行基上人は大悲観音応臨の聖地をこの地に探し求め、自ら刻んだ本尊観世音菩薩を安置したのが縁起といわれています。  
本尊の霊徳は遠く京都に及び、白河、後白河天皇の勅願あつく定額寺の列に加えられていました。その後今川、豊臣、徳川等武将の信仰を得て特に慶長7年家康公五万石の格式を以って遇せられ、一山十二坊の法燈が栄ましたが、明治維新に朱印地返還、十二坊を廃して総号尊永寺と改め今日に至りました。
- \* 袋井市豊沢2777 0538 - 43 ~ 3601

医王山・油山寺

- \* 薬師如来
- \* 山号・医王山
- \* 真言宗
- \* 大宝元年
- \* 当山は医王山薬王院油山寺(いおうざんやくおういんゆさんじ)と称し、今から約千三百年前(大宝元年)に行基大士が万民和楽、無病息災を祈念し本尊薬師如来を奉安、開山された真言宗の古刹であります。  
昔、この山から油が出ていたので通称「あぶらやま」

と呼ばれ、十方信徒に尊信されてきました。

行基大士御開山の後、天平勝宝元年に時の帝孝謙天皇が御眼病のみぎり当油山寺に御眼病平癒の祈願が下され本尊薬師如来に祈願、るりの滝水を加持し、天皇はこの霊水で御眼を洗浄なされ、ひとえに薬師如来を尊信し玉うところ靈験あらたかに眼病が御全快し、当山を勅願寺に定められました。

以来千年の今日まで諸病全快、特に目の守護、眼病平癒のお寺として、又、精神的には「心身安楽」心の病を癒し心眼を開く仏様として深く信仰されております。

又、当山の守護神である軍善坊大権現は、足腰の病に靈験あらたかであるところから油山寺は目の仏様、足の神様として日々全国から信者のご祈祷、参拝が後を絶えません。

行基御作の薬師如来像は秘仏として本堂内陣の厨子に千古そのままに安置され、軍善坊大権現はその左側にお祀りされております。

爾来、歴代天皇はもとより諸大名の帰依はふかく、なかでも源頼朝公、今川義元公は堂塔を建立されましたが戦国の兵乱、廃仏毀釈などを経て今日に至りました。

一山境内五十町歩は千古の霊地、山川の美に恵まれ、峰の松風、谷川のせせらぎ翠岩より落ちる滝の響きは孝謙帝の御世をあらためずご本尊薬師如来をはじめ山内諸天善神の御靈験、法灯はますます輝きを増し東海の名刹、心の静養安らぎの寺として、又、遠州三山のひとつとして古の風情を今に残しております

\* 袋井市村松 1 番地 0538 42-3633

#### 法松山・可睡斎

- \* 観世音菩薩
- \* 山号・法松山
- \* 曹洞宗
- \* 草創・

\* 11代目の住職仙麟等膳(せんりんとうぜん)和尚は、幼い徳川家康とその父を戦乱の中 から救い出しかくまいました。その後、浜松城主になられた徳川家康は、親しく和尚を招いて旧恩を謝し、その席上でコクリコクリと無心にいねむりをする和尚を見て徳川家康はにっこりせられ「和尚我を見ること 愛児の如し。故に安心して眠る。われその親密の情を喜ぶ、和尚、眠るべし」と申されました。それ以来仙麟等膳(せんりんとうぜん)和尚は「可睡和尚」と称せられ、後に寺号も東陽軒から「可睡齋」と改め、駿河、遠州、三河、伊豆四ヶ国の僧録司(そうろくす)という行政取締役の職をあたえ拾万石の待遇にせられました。以来、可睡齋歴代の住職は高僧が相次ぎ、名実ともに東海道における、禅の大道場として面目をほしいままにしております。

\* 袋井市久能2915 - 1 0538 42~2121

距離	約1 Km + 4 Km + 2 Km
タイム	三島コロナ前5:00 - 下土狩駅5:10 - 旧247農協発5:40 - 裾野IC - 沼津IC 富士IC 掛川IC エコパ横発8:10 - 法多山・尊永寺8:30~9:30 - 巡礼 広愛大橋(バス乗車) - 油山寺11:00~13:30 - 可睡齋14:20~15:30 「和の湯」16:00~17:30 - 富士 下土狩
温泉	袋井「和の湯」(なごみのゆ)1000 -、回数券11枚10000 -
経費	油山寺座禅10000 -
参考資料	「遠州三山」HP

5月10日 伊豆八十八巡礼の特別編として遠州三山巡礼が行われた。遠州三山とは、法多山尊永寺、油山寺、可睡齋の三山を言う。前者二山は真言宗、可睡齋は曹洞宗である。厳しさはないが、しかし深遠な雰囲気を残す遠州の山奥に三山は鎮座する。

早朝、私は東京に帰る事情で沼津ICでバスを待つが、御殿場のSさんが、

今朝2時まで仕事で結果、寝坊し45分程遅れて来た。その後、富士ICでS夫妻を乗せ、全員揃い出発。天気は、無風・快晴・高温。牧ノ原SAで休憩後、掛川ICで高速を降りる。

8:10 法多山へ向かう。バスで乗りつけたのでは巡礼の意味がないと小笠原運動場にて下車。歩く。この日は最高気温28度、真夏日の予報である。さすがに朝から太陽の光が強い。しかし、手前から歩いた甲斐あって、法多山の山門と巨木のもたらす涼しい木陰は天国に思えた。バスで乗りつけたら楽チンだけれど、この心地よさはない。これが歩く事の意味でもあるのだろう。「ご利益！ご利益！」と「ないものねだり」をするのではなく、今、この心地よさが「ご利益」なのだと思う。こういう生き方ができたら、きっと皆幸せになれる。

大きく立派な山門には左右、二体の仁王像が睨みを利かせていた。ただ、向かって右の仁王さまの顔は何故か「可愛い」感じだった。

数百年の杉並木を後にすると、8:30、本堂まで174段の階段を一気に登る。おつとめ。下山路は新緑に包まれている。



本堂に上がる階段

法多山の山門



本堂は物凄く立派なものだった。これだけのものは中々ない。後で油山寺の

住職から聞いた話だが、正月だけで一年分の経費を稼ぐのも、領ける。

本堂のお勤めは叶わないかと思ったが、意外や、快く承諾してくれた。暗く静かで大きな本堂だった。否が応でも、敬虔な気持ちになる。



法多山本堂前

9:00 法多山名物「厄除ダンゴ」を食す。いつも思うのだが、厄はよけるのではなくて、受け入れて体の中で幸せに変えるのが良いと思う。般若心経の中に「度一切苦厄」と言う部分がある。「苦しみを救う」と言う意味だが、解釈には「苦がそのまま楽であり、楽がそのまま苦である事を知る」事とある。

「幸せばかりある世界では、退屈で終いには幸せも感じなくなる。苦しみがあからこそ、人は幸せになれる」という事を言っているそうである。

9:30 法多寺出発。ますます太陽は高く、アスファルトの照り返しで体感気温は 30 度。暑い！国道をはずれ田舎道に入ると一面茶畑である。お茶畑では、太陽は真夏でも時折吹く風はやはり 5 月の爽やかなそよ風である。お茶畑とそよ風に合掌。

10:15 宮前橋 休憩。ここから 25 分歩いた「広愛大橋」で全員バスに乗る。

次に向かう油山寺の住職に法話・座禅・昼食をお願いしているため、時間厳守しなければならないからだ。ただ、バスで寺までは乗り付けない。手前の津島神社から歩く。後藤先生のこだわり。

11:00 油山寺到着。おつとめ。続いて法話。山門に鎮座していた仁王様によく似た住職が出てきて一瞬緊張したが、話し始めたらいきなり恵比寿様のような顔になった。安堵。

油山寺は古いお寺で維持、管理が大変との事。しかし、50年前に立てた部分もう建替えなければならないのに対し、230年前に建てられた部分はびくともしないそうだ。日本の宮大工の職人芸のすごさに敬服である。法話の後、20分の座禅を体験。

後藤先生は座禅中、「観音菩薩みたいなもの」が見えていたというのだが、たぶん暑い日の巡礼で喉が渴ききっていたために、ビールの泡が観音菩薩のように見えていたものと推察される。それが証拠に座禅後、缶ビール2缶一気飲み、その後、寺で昼寝をした。



油山寺



昔の掛川城のシャチホコ



油山寺  
重文の三重の塔



奥の院

13:30 油山寺の「るりの滝」「本堂」をお参りし出発。ここから、次に向かう可睡斎までは舗装されている道路だが、一応山道である。太陽もやや傾き始め、吹く風に背を押されるように歩く50分の道のり。

14:20 可睡斎につくと参道に「手作りアイスクリーム」の看板、茶屋ではピーナッツの試食を勧めている。一同、寺よりも何よりも参道の方に吸い寄せられる。どの人の煩惱もなかなか手強い。後藤先生が「買うのはお参りしてからにして!」とさかんに注意を呼びかけていたが、自身もピーナッツの試食を口に含んでいる様子。

14:30 可睡斎にておつとめ。これで三山巡礼を終える。なんとも言えぬ爽快感。

帰りのバスの中で、全員が感想を述べた。「皆さんに、又お会いできて嬉しかった」との言葉が多い。すべての存在が空。命あるものはいつかは終わる。その限られた時間の中で縁あって共に歩く人たちとの触れ合いは本当に尊いと思

う。参加者たちとの縁と満ち足りた笑顔に合掌。



可睡齋

